

古墳時代「未焼成」勾玉について

古墳時代の関東地方では、竪穴住居に造りつけ竈が普及する前後に、竈神あるいは火の神を対象にした屋内祭祀があった可能性があり、竈周辺から土製勾玉などが見つかることがある。そうした勾玉には埼玉県児玉町真鐘寺後遺跡など、固化が不十分なために粉々に砕けて、取り上げ不可能な例がある。これを「未焼成」勾玉とし、それ自体に「祭祀」的な意味を考える向きがあるという。

土を乾燥しただけの未焼成勾玉が実際にあるのか、いわゆる焼きむらなのか、それによって意味するところが異なる。すべて「祭祀」とする前に、科学的に厳密な検討を行うべきと思う。このほど、そうした「未焼成」勾玉を分析検討する機会を得たので、以下に結果を述べる。

分析試料は、千葉県野田市南大和田遺跡第18号住居跡の土製勾玉2点。伴出した土器は和泉式から鬼高式にかかる時期である。試料NO.1は竈脇の横転した甔内にあった「未焼成」品。通常は姿のみを留め取り上げることができないが、甔内に保護されたために幸いにも遺存した。分析したのはこのうちの2片(2.1g、3.0g)。固結が不十分で表面の砂が剥落する。比較のため、同竈の発見品である試料NO.2を併せて分析した。こちらは十分固結した完形の「焼成品」で、大きさは全長4.4cm、最大径1.7cm。表面を丹念に調整し、勾玉頭部の穿孔は先がとがった繊維質の工具により両側から行う。

X線回折粉末法による鉱物種の同定および熱分析法によって、焼成温度を推定した。2試料は基本的に同質の土であり、砂質土を主体とした淘汰土を使用し、礫の混和はない。色調はNO.1がやや暗い色調を呈し、NO.2は明

図1 試料NO.1, 2 (左) とNO.2のX線CT二次元スライス画像(右)

黄土色である。X線回折粉末法による測定では両試料とも石英・長石を検出したが、粘土鉱物を示すピークは測定できなかった。

一方、熱分析の結果は、異なるパターンを示した。試料NO.1は、470℃付近に粘土鉱物の存在を示す典型的な吸熱ピークを示した。これはNO.1に非晶質の粘土鉱物が存在することを示し、本試料が不完全焼成で温度が上昇しなかったか、未焼成かを意味する。

試料NO.2は粘土鉱物を示す吸熱ピークが存在しないこと、940℃付近の発熱ピークの存在などからみて、700～800℃程度の温度で焼成したと推定できる。

以上の結果を踏まえると、長期間水分がある埋蔵環境下で「未焼成」勾玉が残存する可能性は少ないから、試料NO.1は不完全焼成と考えて矛盾がない。勾玉の製作にあたって砂質土を主体とする良質の淘汰土を用いたために、却って焼きむらを生じた製品が脆弱となり、遺存状態が不良となったのであろう。

なお、これらの破片については、パラロイドB72の塗布によって表面の固化処理を行った。

試料NO.2については、X線CTスライス画像による断面観察を併せ行った。気泡の配列によって粘土棒をC字形に曲げた痕跡が顕著である。

(肥塚隆保・金子裕之／埋蔵文化財センター)

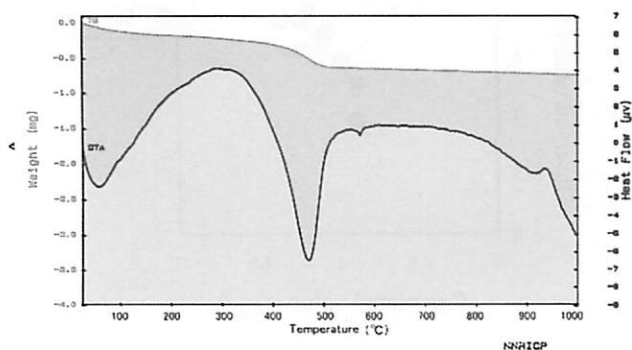


図2 試料NO.1の熱分析グラフ

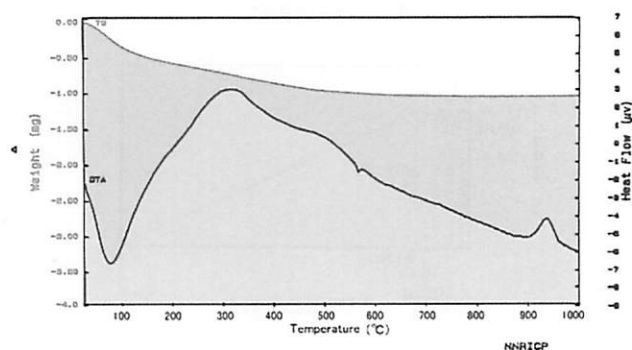


図3 試料NO.2の熱分析グラフ